

ステキな大学職員と、お世話になりっぱなしの学生との懇親会 (11068A)

石田 尚 (システム情報工学研究科 社会システム工学専攻
博士前期課程 2年/写真右)

善甫 啓一 (システム情報工学研究科 知能機能システム専攻
博士後期課程 2年/写真左)

坂東 隆宏 (理工学群 応用理工学類 3年/写真中央)

「こんなにも学生のことを考えて下さるのか」

2011年10月10日の雙峰祭、私が代表を務めるつくば院生ネットワーク (TGN) では「院生プレゼンバトル」を行いました。その構想から、何ヶ月にも及ぶ準備、当日のリハーサルに至るまで、多くの大学職員の方にお世話になりました。そのすべての過程を通じて、このような想いが強くなって参りました。

本来のお仕事とはあまり関係のない範囲にもかかわらず、企画実現のために、何回もミーティングを重ねて下さった方々。例外の出来事に頭を悩ませながら、なんとか解決策を模索して下さいました。学生の一企画に対し、これほど大きく支えて下さったことに感謝感激致しました。

大学生生活の基盤

ところが、特別な企画ではなくとも、普段の学生団体・学生の活動を通して、大学職員の方々には大変お世話になっていることも、当たり前ながらまた事実です。

事務職員の方々との協力なしには、教室の場所一つも取れず、何も成し遂げられません。図書館職員の方々のお力無しでは、研究も進みません。施設部の方々のお力が無かったら、非常に不快な環境になっていたことでしょう。

そして、大学生生活の基盤においてはもちろん、多くの活動的な学生は、事務職員の方々には大変なお世話をかけております。支えてくれる方々がいなければ、大小問わず、何か事を成すことは不可能です。ミーティングをする場所がない、資料がない、広報ができない…。このような環境では何も生まれません。

もっと職員のことを知ってほしい

また、以前の活動を通じて、学生生活課の土子昇さんからはこのような話をお聞きました。

「事務方もなかなか学生と関わる機会が少なく、コミュニケーションの不足が原因で、衝突が起こることもしばしば。だが、学生のために頑張りたいとすごい情熱を持った職員もたくさんいる。職員としては学生に名前を覚えてもらえることで、さらにやる気になるので、ぜひ関係を深めたい。」この言葉を通じて、よりよい大学生活環境・学生の活動環境実現のために、事務職員の方々との関係を深めることは、今後、必要不可欠だという考えに至りました。

しかしながら、現在は双方のコミュニケーションが十分促進されているとは言い切れません。学生側の言葉足らずや、「常識」の違い等でご迷惑をお掛けすることが多々あります。また、学生側は、職員の方に相談しづらい雰囲気があることや、どなたに何を言うべきか混乱してしまうことから、大学側の態度に不満を持つことが多くあるのも現実です。



「いつもありがとうございます！」

大学職員と学生のコミュニケーション促進に向けて

そこで、今回は学生発信で「いつもお世話になっております！」と感謝の意を込めながら、よりよい大学環境の実現のために話し合いの場を設け、相互に意思疎通をするきっかけにしたいと考え、本企画をT-ACTで行うに至りました。

本企画は、ある議題に関係した学生・職員双方の意見を聞きながら、建設的な議論を形成していこうという内容を考えております。また、現在考えているプログラムは、学生と職員との間に潜む「ギャップ」です。例えば、初対面の方に、何かをお願いする時に直接お会いするのが普通ですが、「デジタルネイティブ」と言われる現在の学生の中には、メールで全てを済まそうとする方々も散見されるそうです。しかしながら、経験豊富な職員からは「それは筋が違う」と、驚きを隠せない方もしばしばいらっしゃいます。このように、学生にとっての当たり前と、職員にとっての当たり前の間にはかなりのギャップがあると考えられます。このギャップを埋めるにはどのようなコミュニケーションが必要か…?と云った議論を交えたく構想を練っております。

普段話すことは少ないが、大変お世話になっている職員の方々ー筑波大を語る上で、絶対に外せない方々と、大学環境の質を向上すべく新しいコミュニケーションが生まれるきっかけになることができれば幸いです。



お世話になっている職員の方々